

Title	打出の小槌と共に : 光と水の建築
Author(s)	黒田, 智子
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56419
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

打出の小槌と共に — 光と水の建築 —

黒田智子／武庫川女子大学生生活美学研究所

はじめに

甲子園ホテル（1930）は、フランク・ロイド・ライトの愛弟子・遠藤新（1889-1951）の設計である。ライトの作風をよく伝え文化的価値の高い建築として知られている。一方、「ライト式建築」という呼称は、装飾をはじめとする形態の特徴の相似を意味することが多い。遠藤自身は、帝国ホテルの設計を支える過程で、形態のみに留まらない師の設計理念や方法を包括的に修得し、自分なりに実践・展開することを使命とし、誇りとした。

1. 地域的な視野を持つ装飾配置

遠藤の自信作であるはずの甲子園ホテルについて、遠藤自らが記述した文章は少ない。しかし、本来、建築家の理念と方法は、建築自体に込められているはずである。甲子園ホテルの場合、その建築的特徴のひとつは、豊かな装飾性であろう。とりわけ、ホテルのシンボルである打出の小槌をモチーフとした装飾には、他に類をみない特色がある。

まず、具象的な形態の組み合わせから、抽象的な幾何学構成まで、多様なバリエーションがある。それらが、屋根の棟瓦、壁面装飾、インテリア空間の構成要素となり、緑釉瓦・日華石・金泥彩色の石膏など多様な色・素材を与えられている。また、甲子園ホテルは、東西ほぼ左右対称の建築であるが、西側の地盤が1,500mmほど低い。遠藤は、このわずかな高低差を、西側の階段や床の高低差に変換した。そして、打出の小槌の装飾が、他の装飾と連携しあって光と共に水の流れを明示・暗示するように、要所に配置している。そのような水の流れに視覚・聴覚両方から導

かれた人々は、南側に明るく光る大湯池に降りてきて船遊びを楽しむのである。

「西の迎賓館」と呼ばれた甲子園ホテルの滞在を楽しむのは限られた階層の人々であった。一方、ホテル側は、賃貸料を払って地域住民から大湯池を借り受けていた。池は、ホテルの庭の一部であるだけでなく、周辺地域に農業用水を提供し、田畑に豊かな恵みをもたらすには欠かせない存在でもあった。シンボルである打出の小槌には、ホテルの滞在客だけでなく、地域の人々とも豊かさを分かちたいという願いが込められたのではないか。

2. 開業時のパンフレットの語るもの

開業時のパンフレットのデザインは、ホテルとして営業した14年間に発行された中で群を抜いている。遠藤を招聘した支配人林愛作の意気込みにもよるだろうが、遠藤自身のデザインとも推測される。横長2つ折り、さらに3つ折りという形式を十分に生かす。

いうまでもなくホテルのパンフレットは、サービスや空間のコンセプトを明確に示す役割がある。裏表紙には、大湯池を介してホテル南側の全景が見え、先の考察に重なる（図

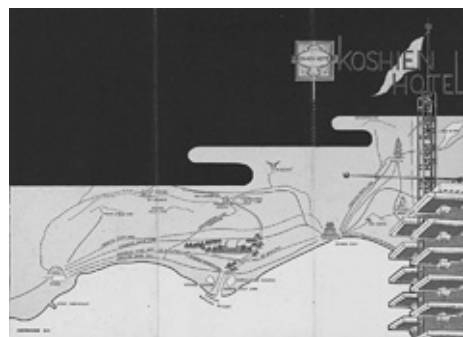


図1 開業時のパンフレット・表表紙

2)。また、開業当時、周辺には田園風景が広がっていたことを考え合わせると、表表紙の塔は、地域のランドマークの意図があったと考えられる。シンボル打出の小槌は、3つ折りのパンフレットの折り目に位置しており、塔（建築）と地図（地域）をつなぐ位置にある。開くと小槌全体が見える趣向である。群青色の流水紋とその下に広がる阪神間の地図を垂直に結ぶ雨を表すように、下方に余韻を示す。

3. ホテルの名称・甲子・大黒天の使い「子」

甲子園ホテルの「甲子」は、十干十二支の最初に位置し、60年に一度めぐってくる。阪神電鉄が、「甲子園」と名づけた住宅地の開発に着手した1924（大正13）年で甲子の年であった。関東大震災の翌年でもある。「世の中の刷新」という本来の意味と、「子」は鼠、つまり大黒天の使いという縁起の良さを兼ねて祈りを込めたのではないだろうか。昭和の初期まで、日本人は、子の日に大黒天に参っていたこと、甲子園ホテル周辺には、西宮戎神社の恵比寿大黒信仰、芦屋の打出の小槌の伝説など、明らかにしておくべき当時の生活文化があり、今後の課題である。

一方、6年後に開業した迎賓館としてのホテルの名称に用いたのは、大恐慌が世界的な広がりを見せる世相にあって、一層刷新と豊かさへの祈りが必要だと考え「甲子」に込め

たからではないだろうか。表表紙の打出の小槌下方には、「子」の甲骨文字が左右に配され、大黒天が示唆される（図2）。

4. 神戸を象徴する菊水紋の意味

表表紙の地図は、ホテルを訪れた外国人向けに阪神間の都市と観光地を示している。注目されるのは、京都を五重の塔、奈良を大仏、大阪を大阪城で象徴するのに対して、神戸を菊水紋で象徴する点である（図1）。

当時、神戸は横浜と並ぶ国際港で、横浜以上に欧米文化の流入・享受が盛んだった。ところが、パンフレットでは菊水紋、つまり、湊川神社で神戸を象徴しているのである。菊水紋の流水は、パンフレットを水平に二分する流水紋と呼応し、その重要性を重層的に暗示している（図1）。また、湊川神社の宝物館には、楠正成の「大黒頭巾兜」（現・重要文化財）が収められており、その額には、打出の小槌の装飾が配される。大黒頭巾とは、大黒天の頭部を覆う頭巾のことである。また、兜は、「甲子」の甲（かぶと）に通じる。甲子園ホテルのシンボルは、湊川神社と深い関わりがあることが示唆される。幕末の志士の精神的支えになり、明治5年に創建、日清・日露戦争に際して、多くの日本人に参拝されたことなどと考え合わせる必要があろう。

むすび

ホテルの名称における「甲子」や、神戸のシンボルに用いた「菊水紋」には、それぞれ関東大震災、遑って明治維新など、近代日本が刻んだ歴史と実り豊かな未来への、遠藤独自の眼差しが認められるように思う。それを土台に、打出の小槌をモチーフとする装飾のバリエーション、建築空間への配置、それらが光と水と共に紡ぎだす周辺地域の豊かな実りへの祈りの表現がある。それは、建築家・遠藤の装飾に関する独自性ではないだろうか。



図2-開業時のパンフレット・裏表紙